

日蓮大聖人御書全集

すしゆんてんのうごしよ

崇峻天皇御書

さんしゆざいほうごしよ

(三種財宝御書)

新版
1592
〜
1597

すしゅんてんのうごしよ さんしゅぎいほうごしよ

崇峻天皇御書 (三種財宝御書)

けんじ ねん がつ にち さい しじょうきんご

建治 3 年 ('77) 9 月 11 日 56 歳 四条金吾

しろこそでいちりよう ぜにいち 結 ときどの おんふみ

白小袖一領・銭一ゆい、また富木殿の御文のみ。なによ

柿 梨 生 鹿尾菜 干 様 々 物

りも、かき・なし・なまひじき・ひるひじき、ようようの物

受 と 品 々 おんつか 給 そうら

うけ取り、しなじな御使いにたび候いぬ。

かみ おん 勞 歎 い そうら

さては、なによりも上の御いたわりなげき入って候。

かみ ごしんよう そうら 殿 うち

たとい上は御信用なきように候えども、とのその内におわ

ごおん 陰 ほけきよう 養 たま

して、その御恩のかげにて法華経をやしないまいらせ給い

そうら かみ おんい そうら たいぼく もと

候えば、ひとえに上の御祈りとぞなり候らん。大木の下

しょうぼうく たいが ほとり くさ まさ あめ 当

の 小木、大河の辺の草は、正しくその雨にあたらず、そ

みず 得 つゆ 伝 気 得 榮

の水をえずといえども、露をつたえ、いきをえて、さかう

そうろう あじやせおう ほとけ おん

ることに候。これもかくのごとし。阿闍世王は仏の御

敵 うち ぎ ば だい じん ほとけ こころがし

かたきなれども、その内にありし耆婆大臣、仏に志あ

つね くよう くだいおう き み

りて常に供養ありしかば、その功大王に帰すところ見えて

そうら

候え。

ぶつぼう なか ないくんげご もう おお だいじ しゅうろん

仏法の中に内薫外護と申す大いなる大事ありて宗論にて

そうろう ほけきよう われ ふか なんだち うやま ねはんぎよう いっさい

候。法華経には「我は深く汝等を敬う」、涅槃経には「一切

しゆじよう ぶつしようあ めみようぼさつ きしんろん しんによ

衆生ことごとく仏性有り」、馬鳴菩薩の起信論には「真如

ほう つね くんじゅう

ゆえ

もうしんすなわ

めつ

ほつ

の法、常に薰習するをもつての故に、妄心即ち滅して、法

しんけんげん

みろくぼさつ

ゆがろん

み

隠

身顕現す、弥勒菩薩の瑜伽論には見えたり。かくれたるこ

顕

とく

そうろう

とのあらわれたる徳となり候なり。

みうち

ひとびと

てんま付

さき

されば、御内の人々には天魔ついて、前よりこのことを知

との

ほうもん

くよう

障

こんど

つて、殿のこの法門を供養するをささえんがために今度の

だいもうご

つく

い

ごしんじんふか

じゅうらせつ

大妄語をば造り出だしたりしを、御信心深ければ十羅刹た

たてまつ

やまい

かみ

わ

すけ奉らんがためにこの病はおこれるか。上は我が

敵

思

いつ 且

もう

もち

かたきとはおぼさねども、一たん、かれらが申すことを用い

たま

ご 所

労

だいじ

長

給いぬるによりて、御しよろうの大事になりてながしらせ

たも

かれ

はしら

侍

りゆうぞう

倒

わざん

給うか。彼らが柱とたのむ竜象すでにたおれぬ。和讒せし

ひと

やまい

冒

りようかん

いちじゆう

たいか

人も、またその病におかされぬ。良観はまた一重の大科の

もの

だいじ

あ

だいじ

者なれば、大事に値って大事をひきおこして、いかにもな

そろう

只

そろう

り候わんずらん。よもただは候わじ。

との

おんみ

危

おも

そろう

これにつけても殿の御身もあぶなく思いまいらせ候ぞ。

いちじよう

敵

狙

たま

双

六

いし

ふた

一定かたきにねらわれさせ給いなん。すぐろくの石は二つ

なら

掛

くるま

わ

ふた

みち

傾

並びぬればかけられず、車の輪は二つあれば道にかたぶか

かたき

ふたり

もの

鬱

愠

そろう

失

ず。敵も二人ある者をばいぶせがり候ぞ。いかにとがあ

おと

み

放

たも

りとも、弟どもしばらくも身をはなち給うな。

との いちじようはら悪 そう 顔 あらわ だいじ おも

殿は一定腹あしき相かおに頭れたり。いかに大事と思

はら もの てん まも たま し たま との

えども、腹あしき者をば天は守らせ給わぬと知らせ給え。殿

ひと 過 ほとけ 成 たも

の人にあやまたれておわさば、たとい仏にはなり給うとも、

かれ よろこ なげ もう くちお

彼らが悦びといい、これよりの歎きと申し、口惜しかるべ

かれ 励 いにしえ かみ ひ

し。彼らがいかにもせんとはげみつるに、古よりも上に引

つ そと 姿 静

き付けられまいらせておわすれば、外のすがたはしすまり

うち むね 燃

たるようにあれども、内の胸はもうるばかりにやあるらん。

つね かけ み いにしえ 子 うやま

常には彼らに見えぬようにて、古よりも家のこを敬い、

公 達 参 たま かみ め

きゆうだちまいらせ給いておわさんには、上の召しありと

も、しばらくつつしむべし。

にゆうどうどの

たま

か

ひとびと

惑

もの

入道殿いかにもならせ給わば彼の人々はまどい者にな

顧

もの

ごころ

殿

るべきをばかえりみず、物おぼえぬ心に、とののいよいよ

きた

み

いちじよう

炎

むね

焚

息

逆

来るを見ては、一定ほのおを胸にたき、いきをさかさまに

吐

公

達

切

もの

にようぼう

かみ

つくらん。もしきゆうだち・きり者の女房たち「いかに上

ご 所 労

と

もう

ひと

そうら

の御そろうは」と問い申されば、いかなる人にて候え、

ひざ

屈

て

あ

それがし

ちから

およ

ごしよろう

膝をかがめて、手を合わせ、「某が力の及ぶべき御所労に

そうら

そうらう

じたいもう

おお

そうら

は候わず候を、いかに辞退申せども、ただと仰せ候え

みうち

もの

そうらう

そうらう

鬢

ば、御内の者にて候あいだ、かくて候」とて、びんを

掻掻 直直 垂垂 強強 爽爽 こそでこそで いろいろ
もかかず、ひたたれこわからず、さわやかなる小袖、色あ

ものもの 着着 念念 ござらんござらん
る物なんどもきずして、しばらくにようじて御覧あれ。

かえかえ がえがえ おんこころ得おんこころ得 うえうえ まっだいまっだい ほとけほとけ
返す返す御心えの上なれども、末代のありさまを仏の

とと たまたま そうろうそうろう じよくせじよくせ しようにんしようにん ここ たいかたいか
説かせ給いて候には、「濁世には聖人も居しがたし、大火

なかなか いしいし 堪堪 ついつい
の中の石のごとし。しばらくはこらうるようなれども、終に

焼焼 碎碎 はいはい けんじんけんじん ごじようごじよう ぐちぐち とと みみ
はやけくだけで灰となる。賢人も、五常は口に説いて身には

ふふ まま みみ そうろうそうろう 甲甲 ざざ ささ もうもう
振る舞いがたし」と見えて候ぞ。「ごうの座をば去れ」と申

すぞかし。そこばくの人の人の殿を造り落とさんとしつるに、おお 落落
すぞかし。そこばくの人の人の殿を造り落とさんとしつるに、お

とされずして、はやかちぬる身が、穩便ならずして造り落とお
とされずして、はやかちぬる身が、穩便ならずして造り落と

せけん もう 漕 漕 ふね 壊 じき のち

されなば、世間に申すこぎこいでの船こぼれ、また食の後に

ゆ な かみ 部屋 たま こ

湯の無きがごとし。上よりへやを給わつて居しておわせば、

ところ なにごとな ひ暮 あかつき

その処にては何事無くとも、日ぐれ・暁なんど、入り返

さだ 狙 わ や つまど わき じ

りなんどに定めてねらうらん。また我が家の妻戸の脇、持

ぶつどう いえ うち いたじき した てんじよう

仏堂、家の内の板敷の下か天井なんどをば、あながちに心

得 ふ ま たま こんど 前 かれ 謀 かしこ

えて振る舞い給え。今度はさきよりも彼らはたばかり賢か

もう かまくら 荏 柄 よめぐ とのぼら 過

るらん。いかに申すとも、鎌倉のえがら夜廻りの殿原にはす

こころ 合 あ 語 たま

ぎじ。いかに心にあわぬこと有りとも、かたらい給え。

よしつね へいけ 攻 落 難

義経は、いかにも平家をばせめおとしがたかりしかども、

しげよし 語

へいけ 滅

たいしようどの

長田 おや

成良をかたらいて平家をほろぼし、大将殿は、おさだを親

敵 思

へいけ お

くび

のかたきとおぼせしかども、平家を落とさざりしには頸を

き たま

しにん

とお

ほけきよう

切り給わず。いわんや、この四人は、遠くは法華経のゆえ、

ちか にちれん

いのち

か

屋敷

かみ め

近くは日蓮がゆえに、命を懸けたるやしきを上へ召された

にちれん

ほけきよう

しん

ひとびと

さきさきか

ひとびと

り。日蓮と法華経とを信ずる人々をば、前々彼の人々いかな

顧

たも

うえ

との

いえ

ることありともかえりみ給うべし。その上、殿の家へこの

ひとびとつね

通

敵

夜

い

合

怖

人々常にかようならば、かたきはよる行きあわじとおじるべ

おや

敵

あらわ

おも

し。させる親のかたきならねば、頭れてとはよも思わじ。

隠

もの

ほど

つわもの

つね

睦

たま

かくれん者は、これ程の兵士はなきなり。常にむつばせ給え。

殿は腹悪しき人にて、よも用いさせ給わじ。もしさるなら

ば、日蓮が祈りの力及びがたし。

竜象と殿の兄とは、殿の御ためにはあしかりつる人ぞか

し。天の御計らいに、殿の御心のごとくなるぞかし。いか

に天の御心に背かんとはおぼするぞ。たとい千万の財をみ

ちたりとも、上にすてられまいらせ給いては、何の詮かあ

るべき。すでに上にはおやのように思われまいらせ、水の

器に随うがごとく、こうしの母を思い、老者の杖をたのむ

がごとく、主のとのを思しめされたるは、法華経の御たすけ

にあらずや。羨「あらうらやましや」とこそ御内の人々は思わ

疾 しにん 語 みうち ひとびと おも

るるらめ。とくとくこの四人かたらいて、日蓮にきかせ給え。

ごうじよう てん もう との なきおんちち おんはは

さるならば、強盛に天に申すべし。また殿の故御父・御母

おんこと さえものじよう なげ そうろう てん もう

の御事も「左衛門尉があまりに歎き候ぞ」と、天にも申し

い そうろう さだ しやかぶつ みまえ しさいそうろう

入れて候なり。定めて釈迦仏の御前に子細候らん。

かえ がえ いま わす くびき とき との

返す返す今に忘れぬことは、頸切られんとせし時、殿は

供 うま くち つ 泣 悲 たま

ともして馬の口に付いてなきかなしみ給いしをば、いかな

よ わす との つみ じごく い たま

る世にか忘れなん。たとい殿の罪ふかくして地獄に入り給

にちれん ほとけ 成 しやかぶつ 拵

わば、日蓮をいかに仏になれと釈迦仏こしらえさせ給うと

たも

もち もち も、用いまいらせ候そうろうべからず。同じく地獄じごくなるべし。日蓮にちれん

との

とも

じごく

い

しやかぶつ

ほけきよう

じごく

と殿と共に地獄に入るならば、釈迦しやくわ・法華ほっけ経も地獄にこ

やみ

つき

い

ゆ

みず

い

そおわしまさずらめ。暗くらに月の入るがごとく、湯ゆに水みずを入る

こおり

ひ

焚

にちりん

暗

投

るがごとく、氷こおりに火ひをたくがごとく、日輪にちりんにやみをなぐる

そろうら

少

違

がごとくこそ候まうわんずれ。もしすこしもこのことをたがえ

たも

にちれん

恨

たも

させ給たまうならば、日蓮にちれんうらみさせ給たまうな。

せけん

えきびよう

殿

申

としかえ

この世間の疫病えきびようは、とののもうすがごとく、年とし帰りなば

かみ

覚

そうろう

じゅうらせつ

おんはか

いま

上かみへあがりぬとおぼえ候まうぞ。十羅刹じゅうらせつの御計おんはからいか。今いまし

よ

もの

ごらん

ばらく世よにおわして物ものを御覧ごらんあれかし。

また、世間のすぎえぬようばし歎いて、人に聞かせ給う

な。もしさるならば、賢人にははずれたることなり。もし

さるならば、妻子があとにとどまりて、はじを云うとは思わ

ねども、男のわかれのおしさに、他人に向かつて我が夫の

はじをみなかたるなり。これひとえに、かれが失にはあら

ず、我がふるまいのあしかりつる故なり。

人身は受けがたし、爪の上の土。人身は持ちがたし、草の

上の露。百二十まで持つて名をくたして死せんよりは、生き

て一日なりとも名をあげんことこそ大切なれ。「中務三郎

ざえもんのじよう

しゆ

おん

ぶつぽう

おん

せけん

こころ

左衛門尉は、主の御ためにも、仏法の御ためにも、世間の心

根

かまくら

ひとびと

くち

謳

ねも、よかりけり、よかりけり」と、鎌倉の人々の口にうた

たま

くら

たから

み

たから

われ給え。あなかしこ、あなかしこ。蔵の財よりも身の財

勝

み

たから

こころ

たからだいいち

おんふみ

ごらん

すぐれたり、身の財より心の財第一なり。この御文を御覧

こころ

たから

積

たも

あらんよりは、心の財をつませ給うべし。

だいいちひぞう

ものがたり

か

にほんはじ

第一秘蔵の物語あり。書いてまいらせん。日本始まつて、

こくおうににん

ひと

ころ

たも

いちにん

すしゆんてんのう

国王二人、人に殺され給う。その一人は崇峻天皇なり。こ

おう

きんめいてんのう

おんたいし

しょうとくたいし

おじ

にんのう

の王は、欽明天皇の御太子、聖徳太子の伯父なり。人王

だいさんじゆうさんだい

みかど

しょうとくたいし

め

ちよくせん

第三十三代の皇にておわせしが、聖徳太子を召して勅宣

くだ なんじ しょうち もの き ちん そう
下さる。「汝は聖智の者と聞く。朕を相してまいらせよ」

うんぬん たいしさんど じたいもう たま
と云々。太子三度まで辞退申させ給いしかども、しきりの

ちよくせん や うやま そう たも
勅宣なれば、止みがたくして敬つて相しまいらせ給う。

くん ひと ころ たも そう おう みけしき変
「君は人に殺され給うべき相まします」と。王の御気色かわ

たま しょうこ しん
らせ給いて「なにといい証拠をもつてこのことを信ずべき」。

たいしもう たま おんまなこ あか すじ 通 そうろう ひと 怨
太子申させ給わく「御眼に赤き筋とおりて候。人にあだ

そう こうてい ちよくせん かさ くだ
まるる相なり」。皇帝、勅宣を重ねて下し「いかにしてか、

なん のが たいしい まぬか ごじよう
この難を脱れん」。太子云わく「免脱れがたし。ただし、五常

もう 兵 み はな たま がい のが たま
と申すつわものあり。これを身に離し給わずば、害を脱れ給

わん。このつわものをば内典ないてんには忍波羅蜜にんはらみつと申して、
ろくはらみつうんぬん うち

六波羅蜜のその一なり」と云々。

しばらくはこれを持ち給いておわせしが、たも たま ややもすれば

腹はら悪あしき王おうにて、これを破らせ給いき。やぶ たま ある時とき、人ひと、猪の子い こ

を進まいらせたりしかば、筭 こうがいをぬきて猪の子の眼い こ まなこをず

ぶずぶとささせ給いて、刺 「いつか、憎 にくしと思おもうやつをかく奴 斯

せん」と仰おほせありしかば、太子たいしその座ざにおわせしが、「あら

あさましや、あさましや。君くんは一定人いちじようひとにあだまれ給たまいなん。

この御言おんことばは身みを害がいする劍つるぎなり」とて、太子たいし多くおほの財たからを取と

よ おんまえ

ことば

き

もの

おん引

出もの

り寄せて御前にこの言を聞きし者に御ひきで物ありしか

ひと

そがおとどうまこ

もう

ひと

かた

うまこ

ども、ある人、蘇我大臣馬子と申せし人に語りしかば、馬子、

わ 事

やまとのあやのあたいま

あたいいわい

もう

もの

こ

我がことなりとて、東漢直駒、直磐井と申す者の子を

語

おう がい

おうい

み

かたらいて、王を害しまいらせつ。されば、王位の身なれ

おも

容 易

もう

ども、思うことをばたやすく申さぬぞ。

こうし

もう

けんじん

きゅうしいちげん

九

度

思

孔子と申せし賢人は、九思一言とて、こここのたびおもい

いちどもう

しゅうこうたん

もう

ひと

ゆあみ

とき

さんどにぎ

て一度申す。周公旦と申せし人は、沐する時は二度握り、

じき

とき

さんど吐

たま

聞

われ

うら

食する時は三度はき給いき。たしかにきこしめせ。我ばし恨

たま

ぶつぼう

もう

そうろう

みさせ給うな。仏法と申すはこれにて候ぞ。

いちだい かんじん ほけきよう ほけきよう しゆぎよう かんじん ふきようほん

一代の肝心は法華経、法華経の修行の肝心は不軽品にて

そろうろ ふきようぼさつ ひと うやま きようしゆ

候なり。不軽菩薩の人を敬いしは、いかなることぞ。教主

しやくそん しゆつせ ほんかい ひと ふ ま そら

釈尊の出世の本懐は人の振る舞いにて候いけるぞ。あなか

かしこ にん い 果 無 ちく

しこ、あなかしこ。賢きを人と云い、はかなきを畜という。

けんじ さんねん ひの とうしく がつじゆう いちにち にちれん かおう

建治三年丁丑九月十一日 日蓮 花押

しじようさえものじようどのごへんじ

四条左衛門尉殿御返事